OB会社訪問

アイシン産業株式会社

代表取締役会長 宮川 良一

昭和34年機械科卒
東京秋工会 副会長

本誌に賛助広告を出して頂いている秋工OBの宮川良一氏が起業した、アイシン産業株式会社を訪問取材した。

●会社概要 (アイシン産業HP抜粋)

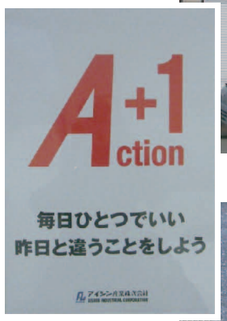
◆**社　名**：アイシン産業株式会社
所在地：埼玉県川口市八幡3-16-21

◆**提供できる技術・商品**
「原料」と呼ばれる物のほとんどが「粉」で、その粉体機器の生産・研究開発をしている。同業他社では作れない微細な粉技術を開発販売しているリーディングカンパニー。

◆**資本金**：5,000万円

◆起　業：1972年31歳の時に創立。現在は埼玉県川口市に本社工場、また東京支店など営業所が4か所にあり、先端技術であるナノ粉体の研究開発子会社も擁している。また中国無錫に中国生産会社を設立している。

川口・本社工場（凡のロゴが見える）

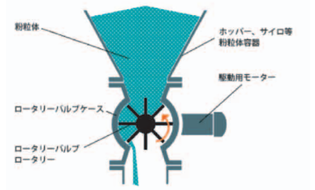


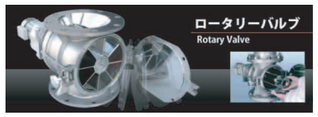
会社標語

東京支店のあるビル（御徒町）

◆**知らない身近な存在「粉体」**
「粉」とは…。このキーワードだけで様々なものを連想できる。身近な「モノ」では天ぷら粉、粉末洗剤、パンやケーキを作る小麦粉などがあるが、人によってそれぞれに発想は違う。
しかし、これはほんの一部にすぎない。普段の生活の中で私たちが扱う殆どの「モノ」は、そのカタチになる前に「粉」だった過程がある。建築に使う建材はセメントや石膏の「粉」から、自動車のバンパーはプラスチックの「粉」、頭痛薬は薬効成分の「粉」…。
一つ一つ数え出したらキリがないほど数多くの「モノ」が「粉」からカタチを形成している。実は、「粉」は身の回りにある様々な製品のもとになっている、とても重要な存在なのだ。「粉」はやや専門的な言い方で「粉体」と書いて「ふんたい」と読む。固体を細かくした粉の集合体を私たちは「粉体」と呼んでいる。「粉体」は私たちの普段の生活の中で実に様々なカタチで密接につながっているとても身近な存在なのだ。
しかし、残念ながらこの「粉体」の過程と存在を知る人はあまりいない。**アイシンは知る人ぞ知る「粉体」機器の専業メーカーです。**

◆**ロータリーバルブとは**
横型円筒ケースの中にモーター駆動で回転するローターを挿入し、上部からローターに充填される粉粒体を回転により下部に移動させ重力によって排出供給する仕組みです。回転を停止することにより粉粒体の供給をストップ、回転開始で供給がスタートします。可変速のモーターと組み合わせることによって、粉粒体の供給スピードをコントロールすることも可能です。





粉体装置

製品ストック

ロータリーバルブのサイズは、ご要求の排出能力から決められます。また、扱う粉粒体は千差万別、材質・ローター形状・多彩なオプションなどあらゆる仕様の組合せから最適な1台を選定できます。

以上アイシン産業HPから抜粋

<インタビュー>

○社名の由来
アイシン産業と名付けた理由は、「愛を信じる "愛信" を創立当時の流行であったカタカナ名にした。またアから始まる名前なので、会社検索や会社紹介などでいつも先頭になる」。

○会社のロゴ 「凡」
「平凡な人たちが集まって、何か非凡な事ができる会社でありたい」から「凡」をロゴにした。

アイシン産業株式会社
ロゴマーク

○主要製品
個体物質を粉にする粉体装置および粉砕装置の製造で、全業界に需要があって用途は広い。例えば食品や化学全般、窯業・セメント、製薬、製紙、電子材料・フイルムなどの高機能樹脂プラスチック・ガラス・電池材料や環境分野などあらゆる業界で使われている。

工場内

製品梱包

○会社設立のストーリー
宮川氏が27～28歳の頃の1968年当時、福岡県に本社がある大盛工業(株)に勤務していたある日、埼玉県の工業技術院の伊藤博士から粉体を定量供給するロータリーバルブの専業メーカーが国内に無く近くの鉄工所で造って貰ったが、エアリークが多くて使い物にならず困っており何とかシール性のいいバルブを作って貰えないかと打診があった。この当時、伊藤博士の必要とする微細粉末を空気の圧力でシールし、炉内に輸送できる高性能なバルブが無かったのである。そこで元・日機装(株)出身の同僚と共同でロータリーバルブの製作に取り組んだ。ローターの羽根にスプリング材を採用して、そのスプリング板の両側の羽根を少しだけはみ出すゴムラバーをアロンアルファで貼ったのを作った。羽の長さを少しずつ切るカット・アンド・トライをしてようやく使えそうなバルブを試作し、それを伊藤博士に評価して頂いた。結果は大変に満足され「これは量産して産業界に貢献すべきだ」とお言葉を頂いた。
この件を勤務先の大盛工業(株)の代表取締役専務に自社でやろうと掛け合ったが「ロータリーバルブはトラブルが多く、対応が大変だからやらない、やりたければ君がやったら！」と言われたそうだ。宮川氏によれば、「君がやったら！は冗談だったと思う」とのこと。大盛工業は生産に興味が無いために、共同試作した同僚と会社を設立することにした。株式会社を設立するには100万円程必要だが、2人合わせて数万円しか手持ち金がなかった。その金で中古の社用車を買ったら現金が無くなった。そうこうしている時に、中和機械(株)が製品の販売権を条件に出資してくれた。2～3年後、増資をめぐり設立した会社を飛び出し中和機械とはたもとを分かち、今のアイシン産業(株)を設立した(当時設立した会社は現存している)。アイシンを設立した時、かつて在籍していた大盛工業(株)の専務も出資してくれた。その結果1972年、宮川氏が31歳の時に資本金100万円で起業できた。
会社を設立したが、当初は決して順風満帆ではなかった。納入済み品のロータリーバルブで顧客もアイシンも解らない不具合が出て、連日連夜泣く思いで対応したこともあったそうだ。
ロータリーバルブは仕様が一つ一つ異なり、少量多仕様であるために管理・生産が大変だ。しかしロータリーバルブの他に輸送機器も製造しており、アイシン産業はこの分野のリーディングカンパニーとして成長出来た。

計測装置

組み立て前の部品

○(株)アイシンナノテクノロジーズ設立
2006年に設立した、ナノレベルの微粉化装置と超微量定量供給装置が好評で、日立や東芝、トヨタやホンダ、パナソニックなど大手企業の研究開発部門の研究員が新素材の開発に粉砕や供給機のテストに訪れている。粉砕によるナノレベルの粒子設計は各メーカーで特徴が微妙に異なるため、何社もテストし開発のテーマにより近いものを求めて遠方から来社する。併せて他社に無い性能を持った微量フイーダを持っているので、値切られる案件は「当社はやりません」と言える程になったとか。アイシンナノテクがやらなければできないケースもあるため強気で営業展開しているとの事。

○中国無錫工場「無錫愛信機械科技有限公司」
2008年に設立した。納入先が中国のトヨタやソニーがあるために、無錫工場からも納入している。無錫に工場を設けるには通常300万円の他に半年位掛かるが、無錫の役所の誘致支援によって、9万円で2,000㎡の工場建屋を得ることが出来た。ただし事務所には500万円掛かったとの事。

●感想
今回の取材でお話を聞いて思ったのは、宮川会長の人柄の良さであった。会社を立ち上げてその業界でトップ企業に育てるのは並大抵の事ではなかったと思われるが、自慢することもなくさらりと説明していた。アイシン産業はまだまだこの分野で成長して行くのではないかと思わされた取材であった。

◆ 記　事　嵯峨 良平 （昭和43年電気科卒）
東京秋工会 副幹事長